

中級日本語学習者を対象とした「(し) そうだ」の理解度調査

ー再指導の効果と併せてー

宮口 徹也

(岡山理科大学留学生別科)

文末表現の「(し) そうだ」は日本語教育においては初級半ばから後半にかけて導入される文法項目である。この表現は、日本語におけるモダリティ表現の一つであり、同一形式を持つ伝聞の「そうだ」と接続や用法の面で混同しやすいことから、学習者にとっては習得が難しい文法項目とされている。本研究では学習者が「(し) そうだ」の接続や用法を実際にどの程度理解できているかを検証するため、「(し) そうだ」を既習である中級レベルの学習者を対象にアンケート調査を実施した。調査の結果、接続の面では特にナ形容詞の場合に伝聞の「そうだ」と混同しやすい傾向が見られた。用法の面では「(し) そうだ」が使用可能な場面と使用不可能な場面を区別できない学習者が多く、「(し) そうだ」の使い方についての理解が限定的である可能性が示唆された。また、イラストを用いて「(し) そうだ」の使用場面に焦点を当てた再指導を行った結果、指導の前後で学習者の理解度が大きく改善したことが確認された。

キーワード：日本語教育、そうだ、様態、伝聞、モダリティ

1. はじめに

本研究の目的は、中級レベルの日本語学習者における「(し) そうだ」の理解度を明らかにするとともに、イラストを用いた場面提示による指導が学習者の理解向上につながるかを検証することである。「(し) そうだ」は「雨が降りそうだ」「このケーキはおいしそうだ」のように動詞および形容詞に接続し、予想や様態を表す文末表現であり、日本語教育においては一般に初級半ばから後半にかけて導入される文法項目の一つである。そのため、日本語学習者にとっては比較的早い段階で触れることになる表現である。一方で「(し) そうだ」は、日本語の数あるモダリティ表現の一つでもあり、2つの異なる用法を持つことから、用法の理解や他との使い分けにおいて困難を覚える学習者も少なくない。特に同一形式を持つ伝聞の「そうだ」とは接続や用法の面で混同されやすく、この点が学習者の「(し) そうだ」の理解を妨げる要因になっているのではないかと考えられる。そこで本研究では、こうした混同の有無やその程度を含め、学習者が実際に「(し) そうだ」をどのように理解しているかを検証するため、同項目を既習である中級学習者を対象にアンケート調査を実施し、その結果を考察した。また、正しい理解を促すための実践として、「(し) そうだ」が使用される場面をイラスト化して提示するという方法で再指導を行い、指導の前後で理解度がどのように変化するかを検証した。

2. 先行研究

2.1. 「(し) そうだ」の用法

本稿を進めるにあたり、まず前提として「(し) そうだ」の2つの用法について簡単に整理しておきたい。「(し) そうだ」は大きく分けて2つの用法があるとされている(寺村 1984、宮崎 2002)。一つは、ある動作的事態の発生が予想されることを表す用法(以下「予想」)、もう一つは、ある性質が外観から推測されることを表す用法(以下「様態」)である。例えば、曇り空を見て「雨が降りそうだ」という場合は予想、ケーキを見て「このケーキはおいしそうだ」という場合は様態の用法に該当する。どちらの用法になるかは、基本的には「(し) そうだ」が接続する品詞によって決まり、動詞の場合には予想、形容詞の場合には様態を表すことが多い。しかし、形容詞が必ずしも様態を表すとは限らず、「明日は人が多そうだ」のように予想を表すケースも少

なくない¹。このように「(し) そうだ」の用法は接続する品詞に依存する傾向があるものの、実際には柔軟な使い方も見られる。

2.2. 学習者によるモダリティ習得の難しさ

「(し) そうだ」は、日本語に存在する数あるモダリティ表現の一つであるが、一般にモダリティ表現は日本語学習者にとって習得が難しいとされており、実際に複数の研究でそのことが示唆されている。大島(1993)は「中上級の語彙量の豊富な学習者であっても、作文で使用する文末は「確言」(筆者注:いわゆる言い切り)ばかりでそれ以外のモダリティ表現の使用がみられないものが相当ある」(p.93)とし、モダリティ表現が日本語学習者の困難点になっている可能性を指摘している。大島(1993)は日本語母語話者と中上級学習者を対象にアンケート調査を行っているが、その結果から学習者は母語話者が推量の形式を選択する場合で「確言」を選択したり、母語話者がほとんど選択しない形式を選択する場合があることを報告している。

日本語学習者によるモダリティ表現の不使用については、佐々木・川口(1994)、山森(2006)、近藤・小西(2023)においても同様の指摘がされている。佐々木・川口(1994)は、中上級学習者と小学生から大学生までの日本語母語話者の作文をモダリティ使用の観点から比較し、学習者は、同年齢の日本人大学生に比べ、命題で終止する文(すなわち、言い切りの文)を多用する傾向があること、真偽判断のモダリティ(「かもしれない」「にちがいない」「はずだ」等)の使用比率が低いことを報告している。また、山森(2006)は、1) 自然発話、2) 一定場面での会話文完成、3) Eメールの3つの場面における日本語母語話者と上級学習者のモダリティ使用を比較しているが、学習者は「と思う」以外のモダリティ表現の使用が母語話者よりも少なく、母語話者がモダリティ表現を用いる場面で断定表現を使用する傾向があることを報告している。近藤・小西(2023)は、上級学習者の研究計画書における誤用をケーススタディとして分析しているが、同研究も「言い切りの文が多く、断定を避ける表現や、伝聞を表す表現の使用が見られなかった」(p.628)と指摘しており、助詞やアスペクト等の他の分析項目と比べ、モダリティは表現の使用自体が少なかったことを同様に報告している。

こうした学習者によるモダリティ表現の使用の少なさや不正確な使用は、モダリティ表現を習得し、使いこなすことが学習者にとって容易ではないことを反映していると考えられる。では、同じモダリティ表現の一つである「(し) そうだ」の習得においては、学習者はどのような困難を抱えているだろうか。この点について、市川(2010)では次のような指摘がされている。市川(2010)は、学習者による誤用を分析し、指導上のポイントをまとめているが、「(し) そうだ」の誤用には、使用すべき箇所で使用しない「脱落」、使用すべきでない箇所で使用する「付加」が観察されるとし、これは「(し) そうだ」が学習者にとっていつ使うべきかがわかりにくいことを示していると述べている(p.246)。また、伝聞の「そうだ」や他のモダリティ表現との混同と思われる誤用も見られることから、正しい接続の形を理解させることや表現間の用法の違いを整理して示すことを指導のポイントとして提案している(同)。学習者の「(し) そうだ」の用法理解については、既出の山森(2006)においても次のような指摘がなされている。山森(2006)は、上級学習者の「(し) そうだ」の使用においては、「外観として観察される性質や内的状態」(すなわち様態)の用法が中心となっており、母語話者に比べ「今後の見通し、予想」の用法が少ないことを指摘している(p.82)。上級学習者であっても後者の用法での使用が難しいという結果から、山森(2006)は、「(し) そうだ」を含むモダリティ表現について、学習者が使い分けできるよう、中級や上級レベルにおいても産出に向けた指導が必要であると述べている(同)。

以上のように、学習者がモダリティ表現を使いこなすには、接続や用法の理解の面で様々な困難があり、この意味で「(し) そうだ」も、その使い方に関してより丁寧な指導が必要な項目であると考えられる。しかし、特に「(し) そうだ」の理解を促す指導法の実践やその効果という点では、管見の限り、これまで十分な研究の蓄積がないのが現状である。

3. 「(し) そうだ」の教科書での扱いと疑問点

3.1. 教科書における「(し) そうだ」の扱い

ここで「(し) そうだ」が教科書において実際にどのように扱われているか確認しておきたい。日本語教育では「予想」や「様態」といった名称を学習者に直接教えることはないが、どちらの用法も例文を通して示される

ことが一般的である。「(し) そうだ」は、上述のように初級で導入される文法項目であり、多くの日本語教材で比較的早い段階で登場している。ここでは初級レベルの主要教材として広く使用されている『みんなの日本語』『できる日本語』『げんき』の3つのシリーズを比較し、それぞれで「(し) そうだ」がどのように扱われているかを検証する²。表1は各シリーズにおける「(し) そうだ」の導入箇所とその内容を示したものである³。参考として伝聞の「そうだ」の導入箇所も併せて記載している。

表1 シリーズ別主要教材における「(し) そうだ」の扱い

	『みんなの日本語』	『できる日本語』	『げんき』
導入箇所	初級Ⅱ 第43課 (第26～50課)	初中級 第2課、第6課 (全15課)	(げんき)Ⅱ 第13課 (第13～23課)
導入内容	予想「雨が降りそうです」 (p.146) 様態「おいしそうですね」 (p.146)	様態「軽そうですね」 (第2課 p.32) 予想「混みそうですよ」 (第6課 p.86) 「週末は人が多そうです」 (別冊 第6課 p.22)	様態「おいしそうです」 「元気そうです」 (p.33) 予想「雨が降りそうです」 (p.33 脚注部分)
伝聞の 「そうだ」の 導入箇所	初級Ⅱ 第47課 (第26～50課) 「あしたは寒くなるそうです」 (p.180)	初級 第15課 (全15課) 「フリーマーケットがあるそうですよ」 (p.256)	(げんき)Ⅱ 第17課 (第13～23課) 「台風が来るそうです」 (p.123)

以上の3つのシリーズを比較すると、「(し) そうだ」は『みんなの日本語』シリーズでは「初級Ⅱ」、『できる日本語』シリーズでは「初中級」、『げんき』シリーズでは「Ⅱ」で導入されていることがわかる。シリーズごとに教科書のラベリングは異なるが、これらはいずれも初級半ばから後半レベルに該当し、「(し) そうだ」を導入する時期としてはシリーズ間で大きな差はない。ただ、導入する内容や各用法の示し方については各シリーズで若干の違いが見られる。

まず用法については『みんなの日本語』では予想と様態が同じ課にまとめて示されているのに対し、『できる日本語』では様態が第2課、予想が第6課と分けて扱われている。また、シリーズの中では『げんき』は様態を中心に扱い、予想は脚注に小さく示すにとどまっている。用法ごとの例文を見ると、すべてのシリーズで予想は動詞（「雨が降りそうです」「混みそうです」）、様態は形容詞（「おいしそうです」「軽そうですね」）を使った例文が示されている。ただし、『できる日本語』のみ形容詞が予想を表す場合（「週末は人が多そうです」）についても別冊（巻末付録）で扱っている。

また、伝聞の「そうだ」（以下「そうだ」）と比較すると、「(し) そうだ」が導入される時期はこれと近いことがわかる。『みんなの日本語』では、43課で「(し) そうだ」が導入され、続く47課で「そうだ」が扱われている。『げんき』でも「(し) そうだ」が13課、「そうだ」が17課で順に導入されている。一方、『できる日本語』は「そうだ」を「初級」、「(し) そうだ」を「初中級」と、シリーズ中の異なるレベルで取り上げている。ただし、「そうだ」は「初級」最終課である15課で導入されており、「(し) そうだ」が導入される「初中級」の2課、6課と比較的近い位置にある。

以上のように、主要教材である上記3つのシリーズは、いずれも「(し) そうだ」について、初級半ばから後半で導入している点、「そうだ」と同時期に導入している点で共通している。また、用法に関しても、予想と様態の2つを扱っている点で共通している。ただし、各用法の扱い方に関しては差異が見られ、『みんなの日本語』『できる日本語』では2つの用法が同程度に扱われているのに対し、『げんき』では様態に重点が置かれている。また、予想用法については、動詞だけでなく形容詞の場合（「週末は人が多そうです」）も示しているのは『できる日本語』のみであり、このケースまでを含めて指導することは一般的ではないと考えられる。

3.2. 教科書から見た疑問点

前節では主要教材における「(し) そうだ」の扱いについて見てきたが、「(し) そうだ」が「そうだ」と合わせ、初級半ばから後半で導入されることは、日本語教材では概ね一般的ではないかと考えられる。では、そのような形で学ぶ日本語学習者は「(し) そうだ」の使い方をどの程度理解しているだろうか。上で比較した教科書の内容を前提に、本稿では学習者の理解に関して次の2点を検討したい。

第一に、「(し) そうだ」と「そうだ」の区別が十分にできているかという点である。これらは接続や用法が全く異なるものの、教科書では導入時期が比較的近い。そのため、そうした指導を受けた学習者が両者を混同せず、「(し) そうだ」の接続、用法を実際にどの程度理解しているかは検証する価値があると思われる。また、市川(2010)の指摘の通り、実際に「そうだ」との混同が見られるとすれば、それが具体的にどの部分で起こりやすいのかという点についても検証する価値があるだろう。

第二に、学習者が「(し) そうだ」の2つの異なる用法(予想と様態)をどの程度理解しているかという点である。教科書では、予想と様態の両方の用法を取り上げているものの、それぞれの意味や使い方には大きな違いがあり、学習者が両用法を十分に理解できているかは疑問が残る。山森(2006)が指摘するように、学習者が使用する「(し) そうだ」が様態用法に偏っているのだとすれば、予想用法についての理解が十分でない可能性も考えられる。また、教科書では主に予想用法には動詞、様態用法には形容詞を使った例が示されるが、形容詞が予想を表すケース(「週末は人が多そうだ」)については十分に扱われていない。そのため、こうした事例を含め、学習者が各用法を正しく理解しているかについても検証する価値があるだろう。

以上の疑問点を検討するため、本研究では「(し) そうだ」を学習済みの中級学習者を対象に理解度調査のアンケートを実施した。以下では、先行して実施した予備調査を含め、アンケート調査の内容と結果を詳しくまとめる。

4. 調査概要と結果

4.1. 予備調査の概要と結果

調査の実施にあたり、初級後半から中級を学ぶ学習者に「(し) そうだ」の学習歴の回答を求め、調査対象者の選定を行った。その上で、習ったことがあると回答した学習者に対して、「(し) そうだ」の基礎知識を確認するための簡単な文法テストを予備調査として実施した。本研究での調査にあたっては、参加者に調査への参加が任意であること、参加の有無や回答内容が成績等の評価に影響しないこと、データ公表時に個人が特定されないようプライバシーに配慮することを事前に説明し、了承を得ている⁴。以下、本節では予備調査の内容と結果をまとめる。

予備調査の文法テストでは、計18名(男性10名、女性8名、19歳～26歳)から回答を得た。回答者は、大学別科に在籍する初級後半(N4)クラスの学生4名と中級(N3)クラスの学生14名で、いずれも国で初級レベル(N5～N4)を学んだ上で来日した学習者である⁵。調査実施時点での日本滞在歴は約2カ月から8カ月で、国籍別の内訳はスリランカ10名、ネパール3名、バングラデシュ3名、中国2名である。文法テストでは、学習者の品詞ごとの接続に関する理解を確認するため、品詞別の変形問題を計4問課した。図1および図2は実際の質問紙の内容を示したものである。なお、伝聞の「そうだ」と「(し) そうだ」を区別できるよう、各設問には文の使用場面を表すイラストを付け、視覚的な補助を加えた⁶。

(1) この かばんは (たかいです →) そうです。 (3) あの仕事は (たいへんです →) そうです。



(2) あの人は (かなしいです →) そうです。

(4) もうすぐ雨が (ふります →) そうです。



図1 予備調査の設問 (1) ~ (2)

図2 予備調査の設問 (3) ~ (4)

図1の設問(1)~(2)はイ形容詞(「高い」「悲しい」)、図2の設問(3)~(4)はナ形容詞(「大変」)、動詞(「降る」)の接続を問うものである。各設問の正答はそれぞれ「たか(そうです)」「かなし(そうです)」「たいへん(そうです)」「ふり(そうです)」であり、学習者が「(し) そうだ」の接続を正しく理解していれば、これらの回答が期待される。

では、実際の回答を見てみよう。18名の設問ごとの正答数および正答率は以下の通りであった。

表2 予備調査の正答数(率)

設問	正答数(正答率)
(1) たかそうです	15/18 (83.3%)
(2) かなしそうです	15/18 (83.3%)
(3) たいへんそうです	9/18 (50%)
(4) ふりそうです	16/18 (88.9%)

表2の通り、イ形容詞の接続を問う設問(1)~(2)、動詞の接続を問う設問(4)では概ね8割の学習者が正答していた。一方で、ナ形容詞の接続を問う設問(3)の正答率は5割にとどまった。

次に、それぞれの設問で学習者が実際にどのような回答をしたかを見ていく。表3は設問ごとの回答の内訳をまとめたものである。

表3 予備調査の回答内訳

設問	回答(数) (「*」は正答)
(1) たかそうです	*たかそうです(15)、 <u>たかい</u> そうです(2)、たかくそうです(1)
(2) かなしそうです	*かなしそうです(15)、 <u>かなしい</u> そうです(3)
(3) たいへんそうです	*たいへんそうです(9)、 <u>たいへんだ</u> そうです(9)
(4) ふりそうです	*ふりそうです(16)、 <u>ふる</u> そうです(2)

表3に示すように、各設問における誤答を見ると、設問(1)の「たかくそうです」という1件の誤答を除き、すべていわゆる普通形(「たかい」「かなしい」「たいへんだ」「ふる」)に接続させた回答であった。特にナ形容詞の接続を問う設問(3)は、正答である「たいへんそうです」に対して全体の半数が「たいへんだそうです」と回答しており、この形での誤答が顕著に見られた。

4.2. 本調査の概要と結果

次に、本調査の内容と結果をまとめる。本調査は予備調査の直後に実施し、予備調査の回答者 18 名のうち、スリランカ人学生 1 名を除く計 17 名（男性 10 名、女性 7 名、19 歳～26 歳）から回答を得た。本調査では、学習者の「（し）そうだ」の用法理解を検証するため、「（し）そうだ」を含む文の使い方について正誤を判断するテストを実施した。テストでは様態用法、予想用法それぞれの文を提示し、イラストで示された場面において、その文による発話が適切かどうかを「正しい」「正しくない」「わからない」の 3 択で評価させた。以下に実際の設問で使用した文とイラストの一部を引用する。



図 3 イ形容詞の様態用法



図 4 ナ形容詞の様態用法



図 5 動詞の予想用法



図 6 イ形容詞の予想用法



図 7 ナ形容詞の予想用法

図 3 および図 4 は形容詞における様態用法、図 5 は動詞の予想用法を示したものである。いずれも教科書で示される典型的な例であり、「（し）そうだ」の使い方としては適切となる。一方、図 6 および図 7 は、形容詞の予想用法を示したものである。これらは教科書ではあまり取り上げられない例ではあるが、使い方としては同様に適切である。

テストには上記の適切な例とは対照的に、「（し）そうだ」の使用が不適切となるケースも含めた。「（し）そうだ」は通常、話し手がすでに事実として認識している事柄を述べる場合には使用できないとされているが（菊池 2000）⁷、この点を踏まえ、不適切な例としては、図 8 および図 9 のように既知の事柄を「（し）そうだ」を使って述べる場面を示した。

ラーメンを食べています。
た



このラーメンは おいしいそうです。

図 8 不適切となる例 1



この花は きれいそうです。
はな

図 9 不適切となる例 2

上記の例で「(し) そうだ」の使用が不適切である理由は、言及している事柄(「(ラーメンが) おいしいこと」「(花が) きれいであること」)が話し手にとって既知であるためである。既知の事柄を述べる際に「(し) そうだ」が使用できないのは、予想、様態のどちらの用法においても同じであるが、今回の調査では、イラスト化して示すという設問形式の制約から、「(し) そうだ」が不適切となる例には上記のような形容詞の様態用法に該当するケースのみを含めた。また、図 8、9 の例は、図 3、7 で用いたのと同じ形容詞(「おいしい」「きれい」)を使用した例であるが、テストには一部の設問で、このように同一の形容詞において適否が分かれるものを対の設問として設定し、学習者がそれぞれの場合に適否を正しく判断できるかも併せて検証した⁸。

次に、調査結果をまとめる。まず対の設問以外の結果から見ていくこととする。表 4 は設問ごとの正答数および正答率を示したものである。なお、実際の設問の順序とは異なるが、以降は便宜上、各設問に番号を付して示す。

表 4 対の設問以外の正答数(率)

設問	正答数(正答率)
(1) あのかばんは重そうです(様態)	15/17 (88.2%)
(2) 田中さんは忙しそうです(様態)	16/17 (94.1%)
(3) 田中さんは暇そうです(様態)	7/17 (41.2%)
(4) この机は丈夫そうです(様態)	8/17 (47.1%)
(5) 雨が降りそうです(予想)	15/17 (88.2%)
(6) 電車が遅れそうです(予想)	13/17 (76.5%)
(7) 明日は暑くなりそうです(予想)	13/17 (76.5%)
(8) 明日も忙しそうです(予想)	12/17 (70.6%)

表 4 の設問 (1) ~ (8) は、いずれも「(し) そうだ」の使用が適切となるケースであり、選択肢では「正しい」が正答となる。用法別では設問 (1) ~ (4) が様態用法、設問 (5) ~ (8) が予想用法にそれぞれ該当する。回答を見ると、設問 (3) ~ (4) のナ形容詞(「暇そうです」「丈夫そうです」)以外の設問では、正答率が約 7 割から 9 割と概ね高い結果となった。特に、教科書でも例文として示されることの多いイ形容詞の設問 (1) ~ (2) (「重そうです」「忙しそうです」)、動詞の設問 (5) (「(雨が) 降りそうです」) は正答率が約 9 割と高かった。また、形容詞の予想用法である設問 (8) の「忙しそうです」は、教科書ではあまり扱われないケースであるが、正答率は 7 割と他の設問と大きな差は見られなかった。ただし、設問 (2) の様態用法の「忙しそうです」と比較するとやや正答率が落ちている。一方で、ナ形容詞を用いた設問 (3) ~ (4) では正答数が半数以下にとどまり、正答率は他の設問と比べて著しく低い結果となった。

次に、対の設問の結果を見ていく。表 5 に設問ごとの正答数および正答率を示す。

表 5 対の設問の正答数（率）

「（し） そうだ」の使用が適切な場合		「（し） そうだ」の使用が不適切な場合	
(1a) おいしそうです（様態）	16/17 (94.1%)	(1b) おいしそうです（様態）	9/17 (53%)
(2a) うれしそうです（様態）	15/17 (88.2%)	(2b) うれしそうです（様態）	12/17 (70.6%)
(3a) 人が多そうです（予想）	8/17 (47.1%)	(3b) 人が多そうです（様態）	4/17 (23.5%)
(4a) 広そうです（予想）	12/17 (70.6%)	(4b) 広そうです（様態）	5/17 (29.4%)
(5a) きれいそうです（予想）	10/17 (58.8%)	(5b) きれいそうです（様態）	12/17 (70.6%)
(6a) 背が高そうです（予想）	13/17 (76.5%)	(6b) 背が高そうです（様態）	3/17 (17.7%)

表 5 の左側は「（し） そうだ」の使用が適切な場合、右側は不適切な場合を示している。選択肢では前者は「正しい」、後者は「正しくない」がそれぞれ正答となる。全体の傾向を見ると、「（し） そうだ」の使用が適切な場合の正答率は約 5 割から 9 割であるのに対し、不適切な場合の正答率は約 2 割から 7 割と全体的に低い結果となった。また、「（し） そうだ」の使用が適切な場合と不適切な場合を比較すると、設問（5a）および（5b）の「きれいそうです」を除くすべての設問で前者の正答率のほうが高くなっている。ただし、設問（2a）、（2b）の「うれしそうです」は、適切な場合と不適切な場合のどちらも正答率が高く、設問（3a）、（3b）の「人が多そうです」はいずれも正答率が低い。一方、使用が適切な場合に限って見てみると、用法別では表 4 の「忙しそうです」と同様に、様態よりも予想のほうが全体的に正答率が低い結果となった。

5. 考察

以上の結果から考えると、学習者は「（し） そうだ」の接続および用法の両面において理解が十分でない部分があると言えるだろう。まず、接続については、予備調査において普通形を用いた誤答が多く見られたが、これは伝聞の「そうだ」（以下「そうだ」）との混同に起因している可能性が高い。表 3 に示されるように、各品詞の接続を問う設問では、誤答のほぼすべてが普通形によるものであった。「そうだ」が普通形接続であり、「（し） そうだ」と同時期に導入されることを踏まえると、これらの誤答は両者を接続面で混同した結果だと考えられる。特にナ形容詞では、全体の半数でこのような誤答が見られたことから、こうした混同の傾向はナ形容詞で顕著なようである。ナ形容詞での混同が多い理由は明確ではないが、形容詞に限定して考えると、「（し） そうだ」と「そうだ」では、接続の規則や形の違いがイ形容詞よりもナ形容詞のほうが特徴的であることが一因として考えられるかもしれない。具体的に言えば、イ形容詞の場合、「（し） そうだ」も「そうだ」も語基の一部を削除して接続するという点では同じであり、全体の形としても似ている（「おいしいです + （し） そうです → おいしいそうです」「おいしいです + そうです → おいしいそうです」）。一方、ナ形容詞の場合、「そうだ」では「丈夫です + そうです → 丈夫だ + そうです → 丈夫だそうです」のように、語基の一部を変換してから「そうだ」をつける必要があり、「（し） そうだ」の場合（「丈夫そうです」）とは作り方も形も大きく異なる。そのため、「（し） そうだ」との比較で考えた場合、ナ形容詞における「そうだ」の接続の規則や形は、学習者にとってある意味では有標的であり、その分「～だそうです」という形が強く印象に残りやすいのではないかと考えられる⁹。ナ形容詞での混同が多いのには、そうした影響もあるのかもしれない。本調査では「暇そうです」「丈夫そうです」「きれいそうです」の 3 つのナ形容詞を用いた表現について適否を判断させたが、学習者が「そうだ」の接続の形（「暇だそうです」「丈夫だそうです」「きれいだそうです」）と混同して認識していたとすると、設問で提示された場面にかかわらず、単純に接続の形だけを根拠にこれらを「正しくない」と判断した可能性も考えられる。その場合、「正しい」が正答となる表 4 の設問（3）～（4）および表 5 の設問（5a）の正答率が低く、「正しくない」が正答となる設問（5b）の正答率が高くなったことも、理解できる結果だと言える¹⁰。

また、対の設問以外も含め「（し） そうだ」の使用が適切な場合に注目すると、表 4 の設問（1）～（2）「重そうです」「忙しそうです」、設問（5）「雨が降りそうです」、表 5 の設問（1a）「おいしそうです」、（2a）

「うれしそうです」は正答率が特に高かった。これらは「(し) そうだ」の例として典型的であり、教科書でも例文として頻繁に扱われるため、学習者にとって見慣れた表現であることが正答率の高さにつながったのかもしれない。一方、形容詞の設問を用法別に比較すると、予想の場合において全体的に正答率が低い傾向が見られる。例えば、「忙しそうです」では、様態用法(表4、設問(2))に比べ、予想用法(同表、設問(8))で正答率が下がっており、同じ形容詞でも用法によって理解に差があることがうかがえる。また、表5においても様態用法の設問(1a)～(2a)と比較して、予想用法の設問(3a)～(6a)の正答率は全体的に低い。形容詞の予想用法は教科書で扱われる頻度が低いため、典型例に比べて適否の判断が難しかったのではないかと考えられる¹¹⁾。

対の設問を比較すると、ナ形容詞の「きれいそうです」を除き、「(し) そうだ」の使用が不適切な場合の正答率が適切な場合に比べ大きく下がっている。このことから、学習者は「(し) そうだ」がどのような場合に使用できないかを正しく理解できていない可能性が考えられる。ただし、使用が不適切な場合の正答率を設問別に比較すると、設問(1b)～(2b)は他の設問に比べ高い正答率を示している。これはこれらの設問で示した場面の性質の違いによるものではないかと考えられる。各設問で提示した場面を詳しく見ると、設問(1b)「おいしそうです」は話し手が対象を口にしている場面(図8参照)、設問(2b)「うれしそうです」は話し手が自分自身のことを「うれしそうです」と述べる場面である。一方で、設問(3b)「人が多そうです」、設問(4b)「広そうです」、設問(6b)「背が高そうです」は、それぞれ対象の人混み、部屋、人物を話し手が直接観察している場面である。つまり、これらはいずれも話し手にとって既知の事柄を述べる場面ではあるが、設問(1b)～(2b)とそれ以外では、対象を単に観察して述べる場面か否かという点で性質が異なる。設問(3b)、(4b)、(6b)のように、対象を観察している場面で正答率が低い、すなわち「正しい」と判断した学習者が多かったことを考えると、学習者は「(し) そうだ」の使い方を「観察によって得た情報をもとに様子を述べる」といった限定的な形で理解し、既知の事柄には使えないという点については十分に認識していなかった可能性が高い。つまり、市川(2010)が述べている通り、学習者にとってはやはり「(し) そうだ」をいつ使うか(あるいはいつ使えないか)という点が理解しにくいのだと考えられる。「(し) そうだ」の導入においては、「このケーキはおいしそうです」や「雨が降りそうです」など、見た様子を述べる場面を例に挙げることが多い。そのため、学習者が「(し) そうだ」の使い方について上記のような単純化した認識を持ってしまうのも、こうした初期段階で得た印象が要因になっているのかもしれない。また、仮に「(し) そうだ」の使い方がそのような限定的な理解にとどまっていたとすれば、今回の調査のようにイラストで対象を視覚的に提示した場合、どの設問においても学習者の心理としては「正しい」を選択しやすかったとも考えられる。その意味ではそれが正答となる「(し) そうだ」の使用が適切な場合の正答率が不適切な場合に比べ、顕著に高くなったことも自然な結果だと言えるかもしれない。

6. 再指導による正答率の変化

調査結果から、学習者の「(し) そうだ」に関する理解については、ナ形容詞の接続、形容詞の予想用法、使用場面の3点で不足していることが示唆された。そこで、これらの点について学習者の理解を促すための再指導を行い、指導の前後で学習者の理解がどのように変化するかを検証した。上述のように、「(し) そうだ」の適否は、話し手が対象を見ているか否かなど、場面に依るところも大きい。そのため、学習者が「(し) そうだ」がいつ使え、いつ使えないのかを正しく理解できるよう、再指導では本調査と同じイラストを用いて、使用場面を示すという方法を採用した¹²⁾。

再指導の流れは次の通りである。まず、典型例である形容詞の様態および動詞の予想に該当するケースについて、適切となる例文を場面のイラストとともに示し、それぞれが表す意味と接続のルールを再確認した。次に、形容詞が予想を表すケースを例文とイラストで確認した後、形容詞ごとに「(し) そうだ」の使用が適切な場面と不適切な場面(予想または様態)を対に示し、それぞれの適否を順に確認した。その上で、学習者が「(し) そうだ」の使い方について誤った認識を持たないよう、まとめとして不適切となる場面を再度提示し、話し手にとって既知の事柄を述べる際には「(し) そうだ」が使用できないという点を強調して説明した¹³⁾。以上の再指導の後、本調査に参加した回答者17名に再度同じテストに答えてもらい、理解度の変化を見た。以下に再指導後

の結果を示す。

表 6 対の設問以外の正答数（率）（再指導後）

設問	正答数（正答率）
(1) あのかばんは重そうです（様態）	16/17 (94.1%)
(2) 田中さんは忙しそうです（様態）	15/17 (88.2%)
(3) 田中さんは暇そうです（様態）	14/17 (82.3%)
(4) この机は丈夫そうです（様態）	15/17 (88.2%)
(5) 雨が降りそうです（予想）	15/17 (88.2%)
(6) 電車が遅れそうです（予想）	17/17 (100%)
(7) 明日は暑くなりそうです（予想）	17/17 (100%)
(8) 明日も忙しそうです（予想）	17/17 (100%)

表 7 対の設問の正答数（率）（再指導後）

「（し）そうだ」の使用が適切な場合		「（し）そうだ」の使用が不適切な場合	
(1a) おいしそうです（様態）	16/17 (94.1%)	(1b) おいしそうです（様態）	17/17 (100%)
(2a) うれしそうです（様態）	17/17 (100%)	(2b) うれしそうです（様態）	17/17 (100%)
(3a) 人が多そうです（予想）	15/17 (88.2%)	(3b) 人が多そうです（様態）	15/17 (88.2%)
(4a) 広そうです（予想）	15/17 (88.2%)	(4b) 広そうです（様態）	16/17 (94.1%)
(5a) きれいそうです（予想）	17/17 (100%)	(5a) きれいそうです（様態）	17/17 (100%)
(6a) 背が高そうです（予想）	15/17 (88.2%)	(6b) 背が高そうです（様態）	15/17 (88.2%)

表 6、7 に示される通り、再指導後はほぼすべての設問で正答率に大きく改善が見られた。指導前に低かったナ形容詞の正答率も、指導後には他と差がなくなっており、大きく開きがあった「（し）そうだ」の使用が適切な場合と不適切な場合についても、いずれも同レベルまで正答率が高くなっている。以上の結果を見ると、接続と用法、使用場面ともに学習者の理解は向上していると考えられ、今回行った再指導には十分な効果があったと言えるだろう。

7. おわりに

本稿では主要教材での「（し）そうだ」の各用法の扱いを比較し、中級学習者を対象としたアンケート調査を通して、学習者の理解度を検証した。「（し）そうだ」は日本語教材においては形容詞の様態用法と動詞の予想用法が主に取り上げられる一方、形容詞の予想用法が扱われることは少なく、今回の調査でも後者において学習者の理解度がやや劣る傾向が確認された。また、接続の面では伝聞の「そうだ」との混同が見られ、特にナ形容詞の接続においてその傾向が顕著であることが明らかになった。さらに、「（し）そうだ」の使用場面に関する理解については、「（し）そうだ」が使用できない場合を正確に理解できている学習者は少なく、対象を観察し、言及する事柄が既知である場面でも「（し）そうだ」を使用できると判断した学習者が多かった。このことから、学習者は「（し）そうだ」の使い方を「観察によって得た情報をもとに様子を述べる」といった単純化された形で理解している可能性が示唆された。一方で、品詞ごとの接続に加え、形容詞の予想を含めた各用法、使用場面に関してイラストを用いて再指導を行った結果、こうした理解度にも大きく改善が見られた。

「（し）そうだ」はその導入において「このケーキはおいしそうだ」や「雨が降りそうだ」など、見た様子を述べる場면을例示することが一般的だが、学習者が「（し）そうだ」の使い方について上記のような誤った認識

を持ってしまうのも、こうした初期段階での指導で得た印象が要因になっているのかもしれない。今回の再指導では、「(し) そうだ」の使用場面をイラストで明示的に指導することで、多くの学習者が、形容詞の予想用法を含め、「(し) そうだ」の使用が適切な場面と不適切な場面を正しく区別できるようになった。「(し) そうだ」の使い方について学習者の理解を深め、誤解を生まないようにするためには、導入初期の段階において、通常の使用場面だけでなく、「(し) そうだ」の使用が不適切となる場面についても丁寧に指導することが効果的ではないかと考えられる¹⁴。「(し) そうだ」の適否が場面に依存しやすいという点では、今回の実践のようなイラストを用いて使用場面を示す方法は有効であり、形容詞の予想用法についてもこの方法を用いれば学習者にわかりやすく示せるのではないと思われる。また、接続面では伝聞の「そうだ」との混同が特にナ形容詞で見られたが、こうした混同を防ぐためには、中級以降においても「(し) そうだ」と伝聞の「そうだ」の用法、接続の違いを整理して示すなど、より丁寧な指導が併せて必要だろう。

一方で、今回の調査は回答者が 17～18 名と少なく、回答者の属性や設問で示した用法にも偏りがあったことから、十分な検証ができたとは言えない部分もある。この点は課題としつつ、今後も「(し) そうだ」のより効果的な指導法に向けて、調査研究を継続していきたい。

注

- 1 逆に動詞であっても「このナイフは切れそうだ」「あいつならやりそうだ」のように、様態に近い意味を表す場合もある(寺村 1984、宮崎 2002)。このケースは日本語教育で学習者に示すことはないため、本稿では扱わない。
- 2 『みんなの日本語』『できる日本語』『げんき』は、それぞれスリーエーネットワーク (2013)、できる日本語教材開発プロジェクト (2011、2012)、Banno, Ohno, Sakane, Shinagawa & Tokashiki (2011)に対応する。記述の都合上、本稿ではこれらを上記のシリーズ名で表記する。
- 3 教科書では「コップが落ちそうだ」「火が消えそうだ」などの例を「直前」の用法として「予想」と区別し示す場合がある。しかし、本稿ではこれも大きく「予想」に分類し、区別しないものとする。
- 4 本研究は岡山理科大学倫理審査委員会の承認を得ている。
- 5 初級後半クラスには、国で初級後半をすでに終えているものの、入学時のプレースメントテストで内容の定着が不十分と判定された学生も含まれる。したがって、同クラスの回答者 4 名は「(し) そうだ」を学習済みではあるが、学習段階としてはまだ中級に入っていない学生たちである。本研究では、初級を一度終えているという意味で、これらの回答者も大きく「中級学習者」に含める。
- 6 イラストはフリー素材サイト『いらすとや』(<https://www.irasutoya.com/>)からの引用。
- 7 菊池 (2000) は次の例を挙げ、「<現実>をそのまま<現実>として述べる場合、ソウダはなじまない」(p.22)と説明している(「*」は当該の文が不適格であることを示す)。
 - (1) [食べ物を口にした上で] *おいしソウダ。
 - (2) [人の容貌を観察して] *あの人、ずいぶん目が大きソウダね。(p.22)
- 8 設問の順序による回答への影響を考慮し、本調査の設問はすべて回答者ごとにランダムな順序で提示した。
- 9 「(し) そうだ」と「そうだ」は別々の課で導入されるが、後から導入される方を教える際や復習時には、混同を防ぐことを目的として両者を対比し、その接続や用法の違いを示すことも少なくない。
- 10 「(し) そうだ」の指導においては、図 9 (「この花はきれいそうです」) のような例を提示して、「きれいそうです」自体を例外的に「言えない表現」であるように教える場合がある。そのため、「きれいそうです」という表現そのものを問題として「正しくない」と判断した学習者がいた可能性も考えられる。
- 11 予想用法で正答率が低いことは、山森 (2006) において学習者の同用法の使用率が低いという報告にも通じる結果であり、学習者が予想用法の習得においてより困難を抱えていることが窺える。
- 12 この方法による再指導は、宮口 (2024a) で筆者が提案した方法を実践に移したものである。
- 13 このとき、「うれしい」「悲しい」など他者の感情については、日本語では例外的に未知の事柄として扱われ、通常「(し) そうだ」を使って述べることを付け加えて説明した。
- 14 先述のように「(し) そうだ」の指導においては、外観を表す形容詞を取り上げて「きれいそうです」等の表

現自体が一様に不可であるような説明が採用される場合があるが、学習者に「(し) そうだ」の適否の本質を理解させるためには、こうした説明の仕方も避けるべきだろう。

付記

本稿は第 63 回日本語教育方法研究会において発表した内容（宮口 2024b）に未収録データと新たな考察、解釈を加え、発展させたものである。

引用文献

- 市川保子（編著）（2010）.『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク
- 大島弥生（1993）.「中国語・韓国語話者における日本語のモダリティ習得に関する研究」『日本語教育』81, 93-103.
- 菊池康人（2000）.「いわゆる様態の「そうだ」の基本的意味－あわせて、その否定各形の意味の差について－」『日本語教育』107, 16-25.
- 近藤智子・小西円（2023）.「日本語学習者の自己添削を困難にする要因についての一考察－研究計画書の草稿に見られる文法的な問題に着目して－」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』74, 614-632.
- 佐々木泰子・川口良（1994）.「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84, 1-13.
- スリーエーネットワーク（2013）.『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 本冊』スリーエーネットワーク
- できる日本語教材開発プロジェクト（2011）.『できる日本語 初級 本冊』アルク
- できる日本語教材開発プロジェクト（2012）.『できる日本語 初中級 本冊』アルク
- 寺村秀夫（1984）.『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- Banno, E., Ohno, Y., Sakane, Y., Shinagawa, C., & Tokashiki, K. (2011). *GENKI: An Integrated Course in Elementary Japanese II Second Edition*. Tokyo: Japan Times.
- 宮口徹也（2024a）.「様態「そうだ」の使用制約に関する記述の再考－日本語教育での扱いを含めて－」『国際教育研究所紀要』34, 45-54.
- 宮口徹也（2024b）.「場面に応じた肯定・否定証拠の提示による様態「そうだ」の指導－中級学習者の既習文法の整理として－」『日本語教育方法研究会誌』31-1, 2-3.
- 宮崎和人（2002）.「認識のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志・田窪行則（編）『新日本語文法選書 4 モダリティ』くろしお出版, 121-171.
- 山森理恵（2006）.「認識のモダリティの使用について－日本語学習者と日本語母語話者の使用の比較を通して－」『東海大学紀要 留学生教育センター』26, 73-85.

A Study on the Comprehension of *Souda* ‘it appears’ Among Intermediate Japanese Learners: Along with the Effects of Re-instruction

Tetsuya Miyaguchi
(Okayama University of Science)

The sentence-ending expression *souda* ‘it appears’ is a grammatical item introduced in Japanese language education from the middle to late stages of the beginner level. This expression is one of many modality expressions and is considered challenging for learners to acquire because it is easily confused with the hearsay expression *souda* ‘they say,’ which shares the same form but differs in terms of connections and usage. In this study, we examined to what extent intermediate learners understand the connections and usage of *souda* based on a questionnaire survey. The results revealed that, in terms of connections, many learners, particularly with *na*-adjectives, confuse *souda* with the hearsay expression *souda*. In terms of usage, it was found that learners often struggle to clearly distinguish between contexts where *souda* is appropriate and those where it is not, indicating limited understanding of its usage. Furthermore, when re-instruction focusing on the appropriate contexts for using *souda* was conducted using illustrations, a significant improvement in learners' comprehension was observed before and after the instruction.

Keywords: Japanese language education, *souda*, appearance, hearsay, modality